

## 青少年期の福島安正と情報活動の起源

澤田次郎

### 要旨

本稿は明治後期に陸軍の情報活動、インテリジェンスの中核を担った福島安正が、明治初年の青少年期、どのような足跡を示し、いかなる思想形成過程をたどったかを検証するものである。結論として以下の諸点を指摘することができる。

第一に、幕末の松本藩時代から新式の軍事教練などを通じて西洋化の波を受け始めていた福島は、明治維新直後、開成学校、大学南校で英学を学んだ。学資が続かず大学南校は退学したが、その後、私塾の北門社を経て、蘭疇社のズイッヒェル、林邸居住の漢学者・巖田正義、江藤新平邸のピン氏、耐恒学社のホワイト、個人教師の鈴木唯一、成功社といった形で学校と教師を転々としながら勉学、とくに英学に励んだ。

第二に、そうした過程で福島は西洋人と直に接し、彼らとコミュニケーションをとるという経験を積んだ。それとともに日本の西洋化、「文明開化」を歓迎し、その進展を願う彼は、たとえば陸軍省文官時代、マッカーマント大尉を案内した際に見られたように、イギリスについては文明国としてポジティブなイメージを抱いていた。

第三に、司法省文官となった福島に大きな衝撃を与えたのは、一八七四（明治七）年の台湾出兵であった。このとき清国との戦争を予想した彼は強い危機感を覚え、愛国心を燃やし、それが契機となって陸軍省文官、さらには武官へと転身していくことになる。

第四に、陸軍文官時代、フィラデルフィア万博に派遣され、さらに西南戦争に征討総督本営付の書記として参加した福島は、戦場から送られる情報を取り扱う任務につき、これが彼の軍事情報活動の出発点となった。

第五に、以上の過程で福島の中で形成された根本的な価値観は、刻苦勉励して身を立て、家名を揚げ、さらに「皇威ヲ海外萬国ニ輝カサン」というものであった。自己の立身出世と日本の国権拡大、対外発展は彼においては矛盾せず、相補い合うものにほかならなかった。

以上の五点に見られる若き日に培われた福島の特徴は、その後、陸軍で情報活動が続ける上でつねに彼の思想の根底にあり、その言動の基盤として作用することになるのである。

キーワード：福島安正、陸軍、参謀本部、情報、諜報、インテリジェンス

### 目次

- はじめに
- 一 修学期
  - 二 司法省時代
  - 三 陸軍文官時代
- おわりに

## はじめに

福島安正（一八五二—一九一九年）は明治期において陸軍参謀本部第二部長（情報担当）、参謀次長を歴任し、陸軍の情報活動、インテリジェンスの中核を担った人物である。当時の陸軍の情報活動という明石元二郎（一八六四—一九一九年）が取り上げられがちであるが、福島は明石の先達として対外情報収集の基礎を築き、明石の先駆的役割を果たした人物であった。

明治期陸軍のインテリジェンスの実態と本質を検討する場合、福島は第一のキーパーソンとなる。そのため筆者は彼のさまざまな時期における情報活動を検証してきた<sup>①</sup>。しかしそうした活動を理解する上で、その原点となる彼の思想形成期の考察は欠かすことができない。福島はどのような青少年期を過ごし、そこでどのような教育を受け、将来の行動の基礎を築いたのか。その情報活動の起源はいかなるものであったのか。この点を究明することによって、のちの彼の言動がより良く読み解けるのではないかと考える。

これまで若き日の福島についてはほとんど研究がなされてこなかった。ただ一つの例外として、島貫重節氏の『福島安正と単騎シベリヤ横断』<sup>②</sup>上巻がある。ここでは少年期から陸軍に入るまでの福島が描写されている。同書はそれまであまり明らかにされていなかった福島の情報活動を詳細に追った先駆的な作品であり、歴史上の空白を大幅に埋めた貴重な

研究である。ただし青少年期の福島については、時系列的に説明がなされておらず、断片的な情景をつなぎ合わせた観があり、記述の根拠となる資料についても明確な提示がなされていない。これは同書の主眼があくまで福島の子ベリヤ単騎横断旅行（一八九二—九三年、三九歳—四〇歳）の検証に置かれているため、やむを得ないともいえる。

そこで本稿では、島貫氏の用いていない資料も活用しながら、青少年期の福島の言動を洗い直し、再検証してみたい。その上で、後年の彼の情報活動の源流をさぐることに目的である。今回用いるのは、①太田阿山編『福島將軍遺蹟』所収の福島日記と年譜、②国立国会図書館憲政資料室所蔵の福島安正関係文書、③天理大学附属天理図書館所蔵の福島日記と書簡、④松本市立博物館所蔵の福島書簡である。いずれも学術論文としては、はじめて利用されるものとなる<sup>③</sup>。

なお原文の引用に際しては、読み易さを考慮して、片仮名、合字を通常の平仮名に改め、適宜句読点を補った箇所があることを断っておきたい。

## 一 修学期

福島安正は嘉永五年九月二五日（一八五二年一〇月二七日）、信濃国松本藩の下級武士であった安広の長男として生まれた<sup>④</sup>。幼名を金重太郎と呼び、長じて運治、のち安正と称した。安正は一歳（満年齢、以下同様）で母を失い、父と祖母によって育てられている。家は貧しく、父・

安広はつねに家計に苦しんでおり、福島は一ないし一二歳のときから藩の茶道部屋に雇われ、家計を助けていた。<sup>⑤</sup>

松本藩は譜代大名(戸田松平家)で、当時の藩主は戸田光則<sup>みつひこ</sup>であった。この光則の下で松本藩は財政、軍制改革(西洋砲術、西洋火術の導入など)を行うとともに、二度にわたる長州征討(一八六四、一八六六年)を命じられている。しかし一八六八(慶応四)年に戊辰戦争が始まり、新政府の東征軍が松本の附近に達したとき、佐幕を捨て勤皇の誓約をし、北越戦争や会津戦争に新政府軍の一員として参加することになる。<sup>⑥</sup>

福島の生誕地は松本城北方の旧町名・西町にあり(現地名・松本市開智三丁目二)、「維新前松本藩士族屋敷割図」を見ると、該当個所に「福島幸八郎」の名が記載されている。<sup>⑦</sup>現在、同地には西町公民館が立てられ、児童用のブランコ、滑り台を具えた小さな公園となっており、敷地内の中心あたりに「福島大将誕生地」と刻まれた石碑が立っている。また公園入口に「郷土の英雄『福島安正大将』略歴」と題した説明板があり、「この旧宅地は大将の遺書により、松本市に寄附されて以来、小公園として市民から親しまれている」との由来が記されている。<sup>⑧</sup>周辺の区割りには昔からそれほど変わっていないと思われ、旧土族町の雰囲気が残っており、とくに福島生誕地から徒歩二分(一九〇メートル)の地点に江戸中期の武家屋敷「松本市重要文化財高橋家住宅」が保存公開されており、当時の藩士の暮らしぶりをうかがうことができる。

一八六三(文久三)年、一〇ないし一一歳の福島は藩の茶道部屋で働くかたわら、藩の練兵「西洋流」に入って兵式練習と軍鼓を学んだ。<sup>⑨</sup>

八六五(慶応元)年、一ないし二三歳のとき、オランダ銃を用いて二〇〇発の射撃を行い、藩主・戸田光則から賞を受けている。<sup>⑩</sup>幕末の動乱期にあって、信州松本でも西洋式軍事訓練の波が押し寄せていたのである。さらに一八六七年、一四ないし一五歳の彼は軍事修業のため江戸に出て、旗本・鈴木邦三郎の塾生となり、兵式訓練を修め、他方、大小鼓笛とラッパを学んだ。翌一八六八年より戊辰戦争が始まると、父・安広は北越戦争に参加して越後口に出征し、福島は藩命によって松本に帰ることになった。<sup>⑪</sup>

以上の福島の境遇は、同じ信濃国の高遠藩の貧しい下級士族であり、のちに教育者、文部官僚として知られるようになる伊沢修二(福島よりも一歳年長、一八五一年生)の場合とやや似ている。幕末の高遠藩も兵制改革を行い、オランダ式訓練を採用し、士気を鼓舞するために鼓笛隊を編成したが、伊沢はその鼓手に選ばれた。そして一八六七年に「徳川家のため戦死すべき覚悟」をもって江戸に上るが、結局高遠藩は翌一八六八年の戊辰戦争では新政府軍に加わることになる。その後、明治維新を迎えた伊沢は英学を志し、高遠藩内で選抜された貢進生として大学南校に入学する。<sup>⑫</sup>西洋列強のアジア進出と幕府の瓦解という時代の奔流に押し流されながら洋学に活路を見出していく若き日の福島や伊沢の姿は、当時の下級武士の子弟に多かれ少なかれ共通するものであっただろう。

一八六九(明治二)年、一六歳の福島は藩主・戸田光則の上京にしたがって東京に向かい、同年四月より開成学校に入学して英学を学ぶようになる。<sup>⑬</sup>開成学校の前身は、幕府が一八五七(安政四)年に開校した蕃

書調所（一八六二年に洋書調所、六三年に開成所と改称）であり、その主要な任務は洋書洋文の翻訳と洋学教育であった。新政府はこの開成所を接收し、開成学校として復興する。開成学校の正式開講は一八六九年一月であり、五月までの間に頭取・内田正雄以下、二等教授として入江文郎（仏学）、中浜万次郎（英学）、鈴木暢（鈴木唯一、英学）、箕作秋坪（蘭学）等、三等教授として伊東昌之助（英学）等、教授試補として大築彦五郎（元幕府ロシア留学生）、市川森三郎（平岡盛三郎、元幕府イギリス留学生、物理学者）、辻理之助（辻新次、旧松本藩士、化学その他）、矢田部良吉（のち植物学者）等がいた。また三月に語学および学術教師として採用されたオランダ系アメリカ人のゲイド・フルベッキ（フェルベック、Guido Herman Fridolin Verbeck）など英米仏の外国人教師もいた。<sup>14</sup>

福島入学当初の教員は以上のような人々であったが、この初期の開成学校に関しては講義日程などの規則が残っておらず、その実態についてははっきりしていない。ただし開講と同時に英語、フランス語クラスが設置されたらしく、新知識を得ようとする者が全国から続々と上京して学生数が急増し、施設、教官の拡充増員に迫られた。寮の寄宿生は定員三〇〇名とされていた。<sup>15</sup>

しかし正式開講から五ヶ月後、福島が入学して間もない一八六九年六月、開成学校は昌平学校、医学校と合わせて「大学校」として形式的に総合的な組織として統合され、さらに一二月に開成学校、医学校がそれぞれ大学南校、大学東校と改称された。<sup>16</sup>したがって福島は当初は開成学

校、途中から改名された大学南校で学んだことになる。

福島在学当時の大学南校の生徒は、まず正則（外国人教師にしたがって語学および諸学科を学ぶ）と変則（日本人教官にしたがって語学および諸学科を学ぶ）のいずれかのコースを選ぶ必要があった。<sup>17</sup>その上で基礎科目として、①語学（英語、仏語のどちらか、一部独語もあり）、②数学を学び、そうした一般教育課程の普通科を終えた者のみが専門科（理科、法科、文科）に進み、たとえば文科であれば、③歴史、文章、地理などのうちから一科、または数科を選択することができた。多少の例外はあったものの、①③のうちどれか一つでも欠けていれば除名となる決まりであった。また普通科の英語教科書としてはジョージ・P・カッケンボス（George Payn Quackenbos）、地理教科書としてはJ・ゴールドスミス（J. Goldsmith）やマーシャス・ウィルソン（Marcus Willson）が著したアメリカの標準的な学校教科書が用いられた。<sup>18</sup>福島は英語、数学の基礎科目に加えて、専門科で地理を学んだと考えられる。ここで、そのころの大学南校の雰囲気を紹介しておきたい。生徒の気宇は壮大で、新時代のエリートをもって任じ、将来の大政治家や大外交官を志し、焼き芋をかじりながら口角泡を飛ばし、治国平天下を談じた。<sup>19</sup>「明治維新の大業は白面書生の手に成れり、吾等一朝風雲に会さば、身卿相となりて国政を料理する易々たるのみ」というのが彼らに共通する抱負であった。<sup>20</sup>その一方で、薩摩、佐賀、熊本、長州、加賀、筑前などの大藩の学生は各グループを形成して街路を闊歩し、その威容を誇示したが、学資が潤沢であったため、酒食に耽溺する者もいた。<sup>21</sup>学校の気風

は「非常に乱暴」であり、食欲旺盛な学生は神田一ツ橋外の護持院ヶ原にあった校舎（現、共立女子大学の所在地）の近くにあって神保町の菓子屋や蕎麦屋にいつもたむろしていた。<sup>22)</sup>

これまで確認されている福島関係の史料の中でもっとも古いものとして、福島が筆写した大学南校の「生徒心得」がある。<sup>23)</sup>これはもともと一八七〇（明治三）年二月に制定されたものの改訂版と考えられ、一七カ条から成るが、その要点を摘記すると以下のようになる。福島が学んだ教場の有様をうかがうことができよう。

- ① 教場の諸規則を守り、教官の指揮に従うこと。違背する者には退学を申し付ける。
- ② 講習〔専門科目〕・語学・数学の三課を兼学しなければならない。
- ③ 修業時間は午前九〜一二時、午後一〜四時で、遅刻する者には課税がある。
- ④ 入学時、これまでの学業に応じて仮に等級を決め、四季の定期試験で真の等級を定める。
- ⑤ 数学は加減乗除、分数比例までは終えなければならない。
- ⑥ 課業の書籍は時宜により貸し渡し、または払い下げるので心得ておくこと。借りる際は短冊に書名を書いた上で捺印し、その課業が終われば返却し、短冊を教官に示した上で新規の書籍を貸し渡す。
- ⑦ 不快故障等で欠席した場合は、生徒勤惰取調局へ届け出ること。
- ⑧ 三ヶ月のうち欠席が二〇回以上の者は除名となる。

⑨ 講習〔専門科目〕・語学・数学のうち一課でも欠ける者は除名となる。

⑩ 退学を申し付けられた者は、その退学の次第により、かつ改心の様子が証人よりはっきりと申し出されるならば、退学日より三ヶ月後に再び入学を許すこともある。

⑪ 洋服を着用し、または無刀無袴などで出席するのは禁止である。

庶人といえども同断。

⑫ 毎月の休業日は第一日、日曜日。もし第一日が日曜の場合は一日を休業とする。

⑬ 事故のため退学を希望する者は、生徒勤惰取調局へ届けること。

⑭ 寄宿舎に入りたい者は、等級六等以上で年齢一六歳から二五歳までの者に限る。

⑮ 自らの希望で寄宿舎を出る者は除名となる。

⑯ 寄宿舎を出るよう申し付けた者は直ちに除名となる。

⑰ 宿所・姓名・肩書などが変わった場合はすぐに生徒勤惰取調局へ届けること。

福島はこのような規則の下で学生生活を送っていたわけである。とくに興味深いのは、⑪「洋服を着用し、または無刀無袴などで出席するのは禁止である。庶人といえども同断」の個所である。洋服を着用して、あるいは刀を差さず、袴を履かないままでの出席は不可であるという。旧武士の子弟が生徒のほとんどを占めていたことがうかがえ、士族以外



の者もその規則に従わなければならなかった。

福島は一八七一（明治四）年三月まで大学南校に在籍していたが、学資が続かなくなり、同校の退学を余儀なくされた。そこで彼は私塾に移ることにし、同年二月、明治新塾と称する学校に入るため、松本藩大属の地位にあった野山なる人物に身元の保証を依頼した。野山が明治新塾の執事あてに書いた身元引受証には、福島が「洋学修業」のため入塾を希望している旨が記されている。<sup>(24)</sup>

福島が実際に明治新塾に入ったかどうかは不明であるが、同じ一八七一年、彼は早稲田にあった北門社に入学したことがわかっている。それに先立つ一八六九年、福島は開成学校で学ぶ一方でこの北門社にも通い、そこで万国史を講読していた。<sup>(25)</sup> ここでいう万国史は当時アメリカでよく用いられ、日本でも歓迎された『パーレーの万国史』(Peter Parley's *Universal History: On the Basis of Geography*)の類であろうか。福島は大学南校退学後、かねてからなじみのあったこの私塾で学ぼうとしたのである。北門社の社長はオットー・ズィッヒエル (Otto Sichel) というドイツ人であった。<sup>(26)</sup> 福島は五名の仲間とともにこのズィッヒエルに英語の教授を願い出ており、その英文合意書が残っている。そこには次のように記載されている。<sup>(27)</sup>

- ① タノ・ミツヨシとその仲間であるカシモト・ツナツグ、福島安正、ヨシミ・ヨシツグ、マツバラ・シンノスケ、カタヤマ・ヨシノリとオットー・ズィッヒエルは次の合意書を交わした。

② タノとその仲間は、明治四（一八七二）年八月一日より四ヶ月間、ズィッヒエルを私塾の教員として雇用する。

③ ズィッヒエルは英語とドイツ語についての共通講義を教える。

④ ズィッヒエルは日曜日と公の休日だけ休みをとる。

⑤ ズィッヒエルはエノウ寺に居住し、支援を提供する。

⑥ 彼の報酬は生徒一人あたり二両となる。

この合意書によると、福島と五名のグループは、北門社の社長ズィッヒエルを個人教授とし、彼が住んでいたエノウ寺で英語とドイツ語の指導を受けたようである。翌一八七二年、柳田藤吉が北門社を閉鎖すると、ズィッヒエルは別に蘭疇社を開いた。北門社は柳田がオーナーであったが、その管理については先述のように蘭疇院を創設した医者松本良順があたっていた。ズィッヒエルはこの松本の保護下に、蘭疇院に付属する形で蘭疇社を開学したのではないかと考えられる（「蘭疇」は松本の雅号）。これに合わせて福島も蘭疇社に移籍した。同社の模様を彼は父親に次のように伝えている。

早稲田村に開校した蘭疇社に入り、ここに留まることすでに六ヶ月。しかるに学生はいまだ三〇名に満たず、ただその内外に限られているようです。これはまったく人の耳に入らないからです。教師の恩が深いのに感じ、適當の場所を選んで学校をすこぶる盛んにし、加えて皇国開化の一助としたいと考え、同志と種々その目的のために心配して

いたところ、幸い四ツ谷南寺町というところに宗福寺という大きな寺があり、そこに六月一日移転しました。そうすると先見にたがわず生徒が日に増加し、今日では英独仏学の徒が合わせて六〇余名となり、さらに日に日に新しい生徒が加わる勢いです。<sup>(28)</sup>

教師の恩が深いのに感じ入って学校を盛んにしようとしたと福島は記している。この教師とはズィツヒェルであろう。ズィツヒェルと一緒に蘭疇社を盛り上げるため適当な移転先を探し、結局、四ツ谷の宗福寺に新たな教室を開いたというのである。<sup>(29)</sup> ちなみにズィツヒェルは同じ一八七二年の二月、銀座の大火に遭い、築地にあった住居、財産を失っていた。そうした事情を知る福島は蘭疇社を助け、「聊カ師恩ニ報ントス」との気持であったという。<sup>(30)</sup> 彼はズィツヒェルを助けて、塾務も担った。具体的には生徒の教育指導、授業にあたっていたと考えられる。福島が貧窮の極にあったにもかかわらず、他の私塾からの招聘を退け、師恩に報いたため、ズィツヒェルは「流涕感激」したという。<sup>(31)</sup> 大学南校で新知識を得ていた彼は、自分とそれほど年齢の変わらない後進の指導を行っていたのであろう。この時期は西洋の知識をいち早く取り入れた者とそうでない者のギャップが大きかったため、わずかな先行者であっても教師の役割を務めることができたし、またそうした者が未熟ではあっても教壇に立つことが求められた。例えばこれは少々極端な例ではあるが、大学南校の教授試補であった矢田部良吉は生徒の福島より一歳年長であるにすぎなかった。

以上、修学期の福島の動向を見てきたが、ここでおさえておきたいのは次の三点である。第一に彼は、官立の開成学校、大学南校、私塾の北門社、蘭疇社で学んだ。とくに北門社、蘭疇社ではドイツ人のズィツヒェルに親しく接触し、教えを受けるだけでなく、一緒に塾の運営にあたった。このように早い時期から西洋人と直に付き合ったことが、やがて彼が陸軍の情報将校として海外に乗り出し、英独仏露語および中国語を駆使して臆せずコミュニケーションを取るようになる基礎を築いたのではないかと考えられる。第二に福島は、彼の世代の多くがそうであったように西洋化、文明開化の申し子であった。幕末にすでに西洋式の軍事教練を体験し、一六歳から開成学校、大学南校で英学を学んだ。学校で英語、地理や歴史を学ぶ中で、彼の目は西洋世界に大きく開かれたと考えられ、蘭疇社時代には同校を盛り上げ、「皇国開化」の一助をなしたいとまで考えるようになっていた。そこには日本の西洋化を正しいものとして信じて疑わない当時の青年の素朴な心情がうかがえる。西洋に対して屈折した心理が少なく、それを大らかに受け止めるというこのとき身に付いた姿勢は、やがて彼がアメリカやヨーロッパへ赴任した際にも発揮されることになるのである。<sup>(32)</sup>

## 二 司法省時代

その後、ズィツヒェルは日本政府に登用され、住まいを陸軍の軍医寮〔軍医部に相当〕に移し、先述のように福島をそこに伴ったが、公務多

忙のため、たまに教えることがあっても十分な効果をあげることができず、福島を慨嘆させることになった。<sup>33)</sup>

その一方で福島は一八七三(明治六)年一月、芝山内(増上寺源興院)にあったイギリス人ジョン・R・ブラック(John Reddie Black)創刊の邦字新聞『日新真事誌』社につとめたほか、愛宕下の勸学塾で教師をつとめた。<sup>34)</sup> そうしたとき蘭疇社時代の教え子の父親で大蔵省出納寮につとめる林某なる人物が、福島にコンタクトをとってきた。福島の勉学が杜絶したことを伝え聞き、将来どうするつもりか使いを出して問い合わせてきたのである。そこで福島が目白台の林邸に向いて事情を説明すると、林は虚しく時間を費やして「開明ノ巨魁」「文明開化の先駆者の地位」を他人に奪われてはいけないと論し、自邸に居住する富山出身の士族・巖田正義という人物を紹介した。巖田は「皇漢ノ学」に通じているので、しばらく彼の下で漢籍を学び、時を待つのがよいというのである。そこで福島は師匠のズイッヒェルに相談したところ、ズイッヒェルは賛同し、「たとえ君が百般の洋書に目をさらし、千秋氷雪を冒しても、漢学の力がなければ坐石の有志に警戒するのみである。洋書を訳し、あまねく日本内外の人民に示し、避邑遠里の愚夫を開化の域に扇動する実はない」と「懇々説諭」した。感激した福島は直ちに目白台に行き、林の下に住み込んだ。林は食費を援助し、鋭気を取り戻した福島は、巖田正義からまず十八史略、日本外史、あるいは必要な経書を学び始めた。そしてちょうどそのころに司法省就職の話が舞い込んだのである。<sup>35)</sup>

これは急にもたらされた話で、一八七三(明治六)年四月二日、松本

に一時帰京していた福島が東京に戻ると、筑摩県東京出張所から突然公文書が届き、司法省において用務があるため一〇時に出頭するようにと連絡し、事情がわからないまま司法省に向くと、その翌日より働くことになってしまったというものであった。<sup>36)</sup> 翌四月三日、二〇歳の彼は一三等出仕として司法省の明法寮(法律の実務家を養成する学校)の翻訳課に採用された。<sup>37)</sup>

以後、福島は目白台の林邸から司法省まで約八kmの道を通ったが、通勤に時間がかかり、学課が妨げられるのが嘆きの種であった。林も同情してくれたが、ここで救いの手を差し伸べたのが初代司法卿の江藤新平である。江藤も林の場合と同様に、かつて四ツ谷の蘭疇社に三人の子供を学ばせており、その子らを助けていた福島がどのような人物かを知っているという経緯があった。江藤は福島に次のように提案した。「わが家でピンという名のイギリス人を雇い、子弟を教育させている。君が私のところに住み、ピン氏から学べば大いに幸福を招くであろうし、通勤の里程も減って少なからぬ便宜を得るだろう」。これを聞いた福島は感激し、もし自分が利に走り、私欲をほしのままにしていたら、今日の困迫にあってだれが助けてくれるだろうか、「後榮ヲ期サント欲セバ、他人ノ榮ヲ祈ルニ如カス。皆天道ハ一ナリ」と感じ入った。<sup>38)</sup>

江藤の申し出を林、ズイッヒェルに語ったところ、両者は「雀躍欣喜」して江藤の提案を受け入れるように勧めた。そこで福島は喜んで麴町の江藤邸に移り、朝から日暮れまでの公務以外に、ピン氏に「窮理修身ノ学」を質し、天文・地理・経済・地質・歴史の各課を学んだ。このころ



の福島は明け方まで猛勉強したようである。しかし約三ヶ月後の七月、ピン氏は仔細があつてイギリスに帰国した。<sup>(40)</sup>

そこで江藤と相談した結果、八月より福島は耐恒学社に入塾した。校師「校長であろうか」はホワイトというイギリス人であつた。このホワイトから学ぶことによつて「少シク進歩ヲ覚」えたという。このように向学心旺盛の福島は、司法省で翻訳の仕事にあたるかたわら、依然として私塾に通いつけていたのである。ところが休日は課業がないので満足できず、仙台出身の竹中新平なる旧友を訪ね、そのついで元大学南校の中博士で当時は正院翻譯局の五等出仕であつた鈴木唯一と面会し、「羅テン学」の教授を依頼した。そのころラテン語を教えることができるのは、鈴木と司馬凌海だけであつたといふ。<sup>(41)</sup>

以上のように大学南校退学後の福島は、私塾の北門社を経て、蘭疇社のズイッヒェル、林邸居住の漢学者・巖田正義、司法省就職後には江藤新平邸のピン氏、耐恒学社のホワイト、個人教師の鈴木唯一といった具合に学校、教師を転々とした。しかしそこに一貫して見られるのは、学を成し遂げたいという強い執念であつた。

こうして福島は学問を追求し続けたが、彼の環境、とくに経済状況は容易に好転しなかつた。目白台の林邸に移つてから「愈々窮困身二迫」つたが、「孝(學) 若シ成ラスンハ死スルモ帰ラス」の言葉を守り、軽衣や要器を売つて漢書、外史を買い、手放さなかつたのは「机硯筆墨ノ類」だけであつたといふ。司法省採用が決まつたときも、役所に来ていく服がなく、「非常ノ策ヲ廻ラシ、嚴證ヲ納シテ」ようやく三五円を調達し、

衣服をあつらえらるとともに、恩義のあつた数名の人々にお礼をした。しかし、しばらくあとで二〇余円を前借したため、合計五五円の借金を負うことになつた。これは司法省入省の翌月の五月中に返さないといけなかつたため、八月に至るまでは一ヶ月九円の収入しかなかつた。それなのに消費は、学費、書籍代(和書、漢籍、洋書)、新聞代からペン、インク、石筆・石版、あるいは和洋の衣類、食事、入浴、洗濯、郵便、重炭、油にいたるまで枚挙に暇がなく、生活レベルが異なるため同僚との交際費も負担となつた。<sup>(42)</sup>

そうした一方で、福島は酷暑の中、重病を患い、「幸ヒ一生ヲ得ル」ような経験をしたといふ。一八七三(明治六)年夏、東京では脚気の患者が続出し、福島の学友・知己もそれで亡くなる者が九人出た。福島も罹患し、八月半ばから「両脚肥満、動氣激烈、歩行意ノ如クナラス」、食欲を失い、周囲に棺桶が運び出されるのを見て、「死、日ヲ俟ノミ」と沈鬱な気持ちに陥つた。友人から牛込逢坂に脚氣治療で効果をあげている老医がいると聞いた彼は、人力車で出向き、水散丸をもらつて養生したところ、一〇日後に効き目が現れ、九月下旬には回復することができた。ただし薬代のため約八円を費やしたのは、借金にあえぐ中で痛手であつただろう。<sup>(43)</sup>

元氣になつた福島は奮起して「公務ヲ励ミ、学課ヲ勉メ」たが、一〇月に耐恒学社が閉校する。学校のオーナーが赤字を償うため、学舎を九段坂上の富士見丁に移転したことが問題となり、オーナーと生徒の立場が両立できなくなつたためである。<sup>(44)</sup> このようにまたしても福島の学びの

つては絶たれたが、彼の志は変わらず、自ら「開明ノ域」に進み、「国恩ニ報テ以テ累代ノ家名ヲ起シ、末世ノ榮ヲ成立セシメン」という決意であった。<sup>(45)</sup> 立身出世して家名を揚げるという強い希望は、環境がどうであつても揺らぐことがなかった。

佐賀の乱勃発から江藤刑死までの間（一八七四年二月四月）、福島は病気の祖母を看護するため松本の実家に帰っていたようであるが、その回復を見て東京に戻った。<sup>(46)</sup> 帰京後、彼は司法省の業務を行いながらであるが、私塾の成功社に入校する。しかし校主が大病を患い入院したため、塾則が乱れ、塾生間の「暴行至ラサル所ナク」、瓦解の状況になつたため退学した。

そのころ（一八七四年春）、彼の生活に再び転機が訪れた。二一歳で「高野氏ノ長女」と結婚したのである。この結婚にあたって福島は、できるだけ外部の煩わしさのない静かな土地に住んで、妻と協力しながら奮励し、学業に従事し、家族の困窮を救って子孫の繁栄を実現したいと考えていた。司法省の翻訳業務だけでは生活が苦しいので、もっと勉強して、高い地位につきたいというわけである。彼にとって学問は、それ自体楽しいものでもあったのだろうが、何よりもまずキャリアアップのための手段であった。そしていろいろと新婚の住まいを探した結果、福田氏なる人物の邸の長屋（牛込下宮比町九番地）に転居した。牛込の下宮比町は現在も新宿区にあり、JR飯田橋駅のほど近くで江戸城外堀が目の前にあり、明治当時は閑静な住宅地であつたと考えられる。以上の経緯を福島は松本の父親に手紙で伝えており、父を呼び寄せた結婚式は

できなかつたようである。<sup>(47)</sup>

福島の妻となつた「高野氏ノ長女」とは、旧幕臣・高野貞潔（三〇〇石）の娘・貞子であつた。<sup>(48)</sup> 私塾で教師と生徒それぞれの経験を踏んできた福島は、新婚早々、貞子に勉学の指導を行っている。彼は松本の父親にその状況を次のように書いている。貞子は「昼夜憤励」、その進歩は「意外迅速」であり、すでに国学では皇国単語を暗誦し、日本地理学、万国地理学、修身大意、勸善懲惡の道を論じる書、西洋事情を卒業し、近日、日本外史を始める手続に運んでいます。近頃洋書も始め、私としても「共ニ学事ヲ勉強シ、後榮ノ期モ目前ニ頭ハレ候様ノ心地ニテ、聊カ万苦ノ一喜ト致シ居候」。このように福島は貞子の勉学を導き、彼女もよくそれに応えたため、深い喜びを感じていた。貧しい中で自分と妻が勉学に励むことが、やがて一家の繁栄につながると信じていたのである。そこで彼は、父親に次のように依頼している。松本でも弟や妹を励まし、「万苦ニ堪ヘテ一箇ノ英名ヲ取」るよう訓責してほしいといふのである。<sup>(49)</sup>

このように若き日の福島は、刻苦勉強、奮闘努力して身を立て、家名を揚げるという価値観を一心に追求する人生を歩んでいた。新しい明治の時代を迎えた向学心旺盛な青年の典型であつたといえよう。さらに福島は自分や家だけでなく、日本の名声も高めなければいけないと考えていた。このころ、彼は私塾の舎長もつとめていたようである。ただ己れの業を鼻にかけていたずらに金を貪るのが舎長の権利ではない、自分に余るものは乏しい人に与え、ともに尽力して「皇威ヲ海外萬國ニ輝カサン」

として日夜勉強するのが舎長の権であると述べている。<sup>(30)</sup>

ただし皇国の国威を世界に輝かせるといっても、福島はウルトラナショナリストであったというわけではなく、西洋から謙虚に学ぶことが重要であると考えていた。それと関連して、彼は次のように述べている。今や皇国は万国と交際するに及んで、その国の学を学び、その国の律を知らなければならぬ。その際、洋人に学ぶことが必要であるが、洋人を雇う金がないため「青年が」志をまっとうできないという実に悲しむべきことがある。たとえ富人がいても、彼らは金の番人に等しく、私欲をほしいままにし、甚しきに至っては「鳥獣のごとき外国人をわが皇国に入れる以上の害があるだろうか」などと政府を嘲るばかりであり、開化の一助をなそうとする者は実にまれである。患うべく、悪むべきことであると福島はいう。<sup>(31)</sup> 西洋人から学び、日本を文明開化に導くことによって、日本の威光を対外的に示すというのが彼の基本方針であった。

これまで見てきたように、福島は「日ニ公務ヲ励ミ、月ニ学課ヲ収メ」<sup>(32)</sup> ていた。日々、司法省の仕事をこなすかたわら、毎月私塾で授業を受けていた（あるいは教えていた）のである。そうした中で得た英学の新知識はすぐに役立つものでもあった。父・安広が病気で悩んでいることを聞いた福島は、以下のような治療法を洋書から翻訳して知らせている。

ご逆上の際〔頭部ないし顔面が熱く充血した際〕、最良の治療法は、まず冷水を土瓶のようなものに入れ、高さ三尺から五尺〔九一cm〜一五二cm〕ほどの所で三人がこれを持ち、瓶口からご頭上へ冷水を落と

して脳中を冷ませば、患いは決してありません。私も酷熱の際、精神を極め、憤励読書するとき、そうした事情が数度あり、甚だしい場合は暫時目が暗み、物色を混じて頭痛激烈、すこぶる困却していましたが、この治療法を人身究理の書中で学んで雀躍し、朝夕これを施して以後、この患いを免れていますので、以上の大略をご忠告申し上げます。たす。食品は野菜を第一とし、とくに暑中、魚肉は避けるべきです。ただし野菜のうち最良の人生を養うものは菜をもって魁とします。魚肉中、養生の主なもの、ニシン、ウナギ、ドジョウの類です。以上、洋書より訳出しました。<sup>(33)</sup>

このように福島は父親に伝えたが、彼自身、真夏の暑さをはねのけるため、頭に冷水を落として勉強しているというところが興味深い。

そうした中で、当時の福島に何よりも大きな衝撃を与えたのは、一八七四（明治七）年五月から一二月にかけて行われた台湾出兵であった。

この事件はそれより約二年半前、台湾に漂着した宮古島の島民が台湾先住民によって殺害された事件（一八七一年一二月、琉球漂流民殺害事件）に端を発するが、日本は台湾に三、〇〇〇名の派兵を行い、現地を制圧した。この事件をめぐる日本と清国の戦争が起こるかもしれないと予感した福島は、次のような一節を書き残している。管見の及ぶ限りでは、それは今日確認することのできる彼の政治的な意見として、もっとも古いものである。<sup>(34)</sup>

……今や国家ノ一大事、皇國支那ト兵ヲ交ヘ運ヲ天ニ問ハントスレト、支那ハ謂ユル地球之大国、兵衰武弱ト口ニハ云ヘト人口五億之上ニ出テ、皇國ハ僅カノ一孤島、実ニ國家ノ存亡ナリ。然リト雖モ義アリ信アリ恥ヲ雪クハ民間ノ大義、万一兵ヲ開クニ至ラハ、士農ヲ問ハス兵ニ入り家ヲ忘レテ族ヲステ、身ヲ支那國ノ土トナシ血ヲ黄河ニソ、グト思ヲ残ス念ハナシ。之ヲ思ヘハ、有カタキ微々タル官ニ加ハレト、兵ヲ免カレ身ヲ修メ多年ニ望ム學問ノ道ヲ進ムハ一大幸福、心ニ問フテ心ニ答ヘ万苦ヲ犯ス今日之形勢……

これによると、清國は兵が衰え、武は弱いといわれるが、人口五億人以上を擁する世界の大国であり、他方日本は一孤島にすぎず、今回の事件は國家の一大事であり、國の存亡がかかっているという。さらにもし日清開戦となれば、日本人は身を捨てて、異郷の地に朽ち果てても悔いはない、それを思うと、自分は微々たる官吏となり、兵役を免れ、學問の道を進んでいられるのは幸せだが、いろいろと自問自答して多くの苦しみを感じているというのである。このように福島は、台湾出兵をめぐる日清の本格的な戦争を想定し、それに強い危機感を抱くとともに、自分は国内で安閑としてよいのかという思いに駆られていた。

結局、日本の台湾出兵に対して清朝政府は妥協的態度をとり、日清間に戦端は開かれなかった。しかしこのときの思い、戦争の予感はず福島にとって精神的に大きな転機をもたらした。後年、彼は次のように振り返っている。「抑モ安正ガ不肖ヲ顧ミス東洋ノ形勢ニ注目シテ、以テ聊カ國

家ニ報ヒント欲セシ端緒ハ、実ニ明治七年台湾征討ノ役ニ於テ之ヲ開ケリ<sup>56)</sup>。つまり福島は台湾出兵をきっかけに東アジアの情勢に視線を向け、報國の精神を催したというのである。清國の存在を意識することによって、逆に自國を意識し、愛國心を燃やしたということである。

以上のように司法省時代の福島は、単に同省で翻譯を行ったり、私塾で英學を学び、地理や歴史の知識を増やすだけでなく、台湾出兵を契機として現実の東アジアの國際情勢に切實な関心をもち、國家の前途を憂え、自分のあり方を考えるようになった。単なる學問だけに飽き足らなくなった彼がやがて軍人の道を進むようになるのは、自然の流れであったといつてよいのかもしれない。

### 三 陸軍文官時代

一八七四（明治七）年九月一日、福島は十一等出仕として陸軍省に採用された<sup>56)</sup>。これは武官ではなく文官としての任用であった。当時、陸軍では台湾出兵の準備等の關係で英語力のある者を急に採用する必要がある、これに福島も応募したという。面接の際、陸軍省の試験官が「陸軍省職員を志願するからには、少し位は軍事について勉強したことがあるはずだと思つので、何でもよいから軍事について得意とするところを述べてみよ」と問いかけた。それに対して福島はアメリカの獨立戦争史について述べたので、試験官たちは自分たちでさえ知らない軍事知識をもっているというので即座に採用を決定したという<sup>57)</sup>。

福島は陸軍省に採用されると同時に参謀局第一課分課に配属された。<sup>(38)</sup>

当時陸軍では山県有朋中將が陸軍卿と参謀局長を兼任していた。参謀局長は参謀局長(将官一)、伝令使(佐尉官二)、第一(総務)課、第二(亜細亞兵制)課、第三(欧亞兵制)課、第四(兵史)課、第五(地図政誌)課、第六(測量)課、第七(文庫)課から構成されていた。参謀局長の職掌は「陸軍卿ニ属シ、日本総陸軍ノ定制節度ヲ審カニシ、兵謀兵略ヲ明カニシ、以テ機務密謀ヲ参画スルヲ掌ル。平時ニ在リ地理ヲ詳カニシ、政誌ヲ審カニシ、戦時ニ至リ図ヲ按ジ、部署ヲ定メ、路程ヲ限リ、戰略ヲ区画スルハ参謀局長ノ専任タリ」と定められていた。また参謀局総務課内に別に諜報提理(佐官一人)が置かれ、「戦時諜報ノ事ヲ総理」させ、在外公使館付武官を管掌した。<sup>(39)</sup>

参謀局時代の福島は以下の任務を命じられている。<sup>(40)</sup>

- 一八七四(明治 七)年二月二五日 参謀局御用で横浜へ差遣
- 一八七五(明治 八)年二月一九日 陸軍省御用で大阪へ差遣
- 四月二五日 第一課分課から第五(地図政誌)課分課に移動
- 一八七六(明治 九)年一月九日 参謀局御用で横浜港へ差遣
- 一月一四日 参謀局御用で下関へ差遣
- 五月二二日 参謀局の関迪教中佐御用で横浜へ随行
- 六月二三日 正院よりフィラデルフィア万

国博覧会へ差遣候事(七月一日出発、一〇月三〇日帰朝)

一八七七(明治一〇)年 一月二三日 参謀局付を申し付けられる

一月一五日 参謀局第五(地図政誌)課分課を申し付けられる

二月二〇日 参謀局御用で大阪へ差遣

二月二三日 征討総督本営より征討軍団書記を申し付けられる

これを見ると福島は、横浜に三回、大阪に二回(そのうちあとの一回は西南戦争出征)、下関に一回、出張を行っている。しかしここでとくに注目されるのは、一八七六(明治九)年にアメリカのフィラデルフィア万国博覧会へ派遣されていることである。

フィラデルフィア万国博覧会は一八七六年五月一〇日から十一月一〇日までの半年間、アメリカ独立二〇〇周年の祝典として開催された。フィラデルフィアが選ばれたのは、いうまでもなく独立宣言発表の地であったためである。会場となったフェアモント公園には幅一四二メートル、長さ五七二メートルという壮大な本館が建てられ、そこでは鋳工業と教育関係の陳列が行われた。そのほかに機械館、農業館、園芸館など数多くの建物が設けられ、機械館ではコーリス(George Henry Corliss)の巨大な蒸気機関や、溶鉱炉に風を吹き込む大送風機が人目を引いた。またこの万博では、裁縫ミシン、タイプライターのように現代人の家庭



の将来を暗示するもの、エンジンつき農業機械、手押しや動力による多数のポンプのようにアメリカの現実を表現するものが展示され、毎分一、〇〇〇発を発射するガトリング砲も注目されたものの一つであった。<sup>(61)</sup> 会期中の入場者は約九八〇万人で、当時としては成功を収めた万博となった。<sup>(62)</sup>

この万博については日本にも参加の勧誘がなされ、日本政府はアメリカとの国交を考慮、重視し、開催から約一年半前の一八七四（明治七）年一〇月末に参加を正式決定した。翌一八七五年一月に太政官の正院内に米國博覽會事務局が設置され、三月には同事務局が内務省の勸業寮に移管された。ここで博覽會は内務省の民業奨励政策、殖産興業政策の一環に組み込まれることになり、内務卿の大久保利通が米國博覽會事務局の総裁、西郷従道陸軍中将が副総裁、田中芳男、山高信離、関澤明清、塩田真らが事務官に任命され、事務局の体制が整えられた。出品の目的は賞牌〔賞として与えられる記章、メダル〕を得て海外に美名を輝かし、将来の輸出を増進することであり、日本全国から物品が募集、蒐集される。その結果、日本の出品物は陶磁器や漆器などの美術・工芸品が中心となったが、それらは会場で注目を集め、非常に好評であり、国際社会の縮図ともいえる万博で日本を強く印象づけることになった。<sup>(63)</sup>

なおここで、陸軍の西郷中将がなぜ米國博覽會事務局の副総裁に選ばれたのかという疑問が生じるが、研究者によると、西郷はその直前まで台湾蕃地事務都督として台湾出兵を指揮しており、その西郷をアメリカに渡航させることにより、万博という場において国威発揚を行うための

パフォーマンス的要素を付与したのではないかという。<sup>(64)</sup>

フィラデルフィア万博にあたっては、副総裁の西郷、および事務官一九名（大半が勸業寮出仕）、事務官随員九名、御用掛四名、その他一六名（審査官、大工等の職人など）の合計四九名が派出された。このうち例えばウィーン万国博覽會（一八七三年）に参加経験がある筆頭事務官の田中芳男は、ほかの事務官や出品人とともに、一八七六年五月一〇日の万博開會に先立ち三月一〇日に横浜を出港し、二六日にサンフランシスコに到着、そこからシカゴ経由で四月四日にフィラデルフィアに入り、万博開會中の七月に帰国便に乗船の上、八月には帰国している。<sup>(65)</sup> また派出された者の中には、陸軍将校として事務官に日高次郎中尉（諸接待、翻訳監督）、御用掛に徳川昭武少尉（翻訳、一八六七年のパリ万博に將軍名代として派遣された経験あり）もいた。<sup>(66)</sup> しかしそれらとは別に、万博が開會してから一ヶ月余り後の六月末、副総裁の西郷従道をリーダーとする陸軍だけのメンバーによる派遣団が編成され、福島もそれに加わり、フィラデルフィアに派遣されることになった。そのメンバーは以下の八名である。<sup>(67)</sup>

副総裁	陸軍中将	西郷従道
随員	歩兵大佐	福原 実（山口県士族）
	同上	小澤武雄（小倉県士族）
	同上	野津道貫（鹿児島県士族）
	会計一等副監督	川崎祐名（鹿児島県士族）

一等軍医正兼馬医監 石黒忠恵（新潟県平民）

砲兵少佐 黒田久孝（静岡県士族）

陸軍省十等出仕 福島安正（長野県士族）

福島は七月一日に日本を出発し、一〇月三〇日に帰国するまで三ヶ月余りの旅路について<sup>(88)</sup>。まずサンフランシスコに上陸した後、鉄道で大陸を横断し、ニューヨーク、フィラデルフィア、ワシントンなどを訪問した。福島はもともと若く二三歳であり、英語の通訳官をつとめ、アメリカ側との交渉にあたった。のちに陸軍軍医総監になる石黒忠恵（三十一歳）と親しくなり、兄事して終生の交友関係を結んだのはこのときからであった<sup>(89)</sup>。

この初の海外旅行を通じて、またフィラデルフィア万博を見学して、福島がどのような感想、アメリカ・西洋観を抱いたのかは明らかではない。しかしながら当時の万博主催者たちは、地球のできるだけ遠いところまで広く視野を及ぼし、世界を一望のもとに収め、整理し、理解したい、すなわち世界を把握したいという欲求に突き動かされており、万博はその「世界」の景色を映し出すものであって、いわば「世界を把握する方法」であった<sup>(90)</sup>。福島はフィラデルフィア万博を見学することによって、この「世界」に接し、それを把握する大きな視座を得たのではないかと考えられる。

またフィラデルフィア万博については数々の細密画が残されているが、福島が見たであろう広大な敷地と多数の建物群、中でも長大な本館や機

械館の規模は今日の目から見ても驚くべきもので、前記の巨大蒸気機関、溶鉱炉用大送風機に加え、ポンプの組み合わせによる華麗な噴水、会場内を走る蒸気機関車、新技術の展示物（電信機やタイプライター、ミシンなど）、見物に訪れた群衆の雑踏などと合わせて、明治初年の東京からやって来た福島にとっては夢のような世界であったと推察される。少なくとも、西洋の科学文明の進歩を目の当たりにして衝撃を受けたことは間違いないのではないだろうか。初めて海外に出た福島青年の心に残る大きな印象が刻印されたことは確かであろう<sup>(91)</sup>。

話を日本国内に戻し、陸軍省参謀局に勤務する文官として、福島は通常、具体的にはどのような仕事をしていたのだろうか。一八七六（明治九）年の例を見ておくと、基本的には英語文書の翻訳である。たとえば六月五日、福島は午前五時より英国海軍敬礼式の大略六枚を訳したのち、参謀局に向向いて原田大佐に渡し、課長の木村少佐より地学字書〔地学辞書〕一冊を借りて一二時四〇分前に帰宅している。また六月一七日、午前八時に福島は出頭し、オセアニア州、アフリカ州所属の島嶼全部について記された翻訳二〇枚を提出している。いずれも平日であったが、彼の場合、今日のような九時出勤・一七時退勤といったワークタイムに縛られていたわけではなく、自宅で翻訳作業を進めていたようである<sup>(92)</sup>。

加えて通訳をつとめることもあった。六月七日の午前中、参謀局より自宅に書簡が届き、中を開けてみると、英国陸軍士官が近衛兵營と鎮台騎兵營所を見学するので、明日八日午前八時に官房に出頭するようにと

の要請であった。案内の手順は出頭の上で説明するとあった。翌八日、午前六時半に自宅近くの牛込橋から人力車に乗って七時に参謀局に着き、さらに八時に官房に到着した。そこから軍馬局より手配された馬車に乗って半蔵門外の英国公使館に向き、ハリー・パークス公使 (Sir Harry Smith Parkes) と面会した。そこで「マカルトマン英国騎兵大尉 (Captain Hugh Mo' Catmont)」を紹介され、同大尉を馬車に案内して見学を開始した。<sup>(14)</sup> このマカルトマンという姓は福島の誤記で、マッカーマント (Captain Hugh McCalmont) が正しいのではないかと考えられる。<sup>(15)</sup>

マッカーマント大尉は一八七三年の第三次イギリス・アシャンティ戦争に出征した経歴があり、今回は世界の兵備を観察するため、アジア、清国から日本に来たところで、二、三日を出ないで横浜を出港してサンフランシスコに向かい、アメリカを回った上でイギリスに帰る予定だということであった。<sup>(16)</sup> ちなみに、のちにイギリス陸軍少将となり、政治家としても活動した同姓同名のマッカーマント (Sir Hugh McCalmont, 一八四五—一九二四年) という人物があり、これが福島の会ったマッカーマント大尉と同一人物である可能性があるのだ、その点については今後の調査課題としたい。

福島とマッカーマント大尉の二人はまず竹橋の近衛砲兵営に赴き、寝室、食堂、厠、病室、獄舎にいたるまで残らず視察した。しばらく士官室で休憩したのち、馬車で馬場先外の東京鎮台騎兵営に移り、同様に綿密に見て回った。それが終わると、突然、兵営内で非常呼集の命令が下っ

た。各兵が銃をもって厩に走り、数分を出ないうちに馬上に銃を負い、剣を握った攻撃態勢をつくった。「其迅速ナル実ニ驚クベク、英ノ士官モ又大ニ感激セリ」。整列が終わると、福島はマッカーマント大尉を英国公使館に送り届けた。別れ際に大尉は自分の姓名と住所を告げて名刺を渡したが、その名刺には第七輕騎兵「連隊所屬」、住所はアイルランド、ダブリンのキルデア通り (Kildare Street) とあった。そして、もしイギリスに来ることがあれば、必ず問い合わせるようにと告げ、礼を述べた。これに対して福島は「実ニ文明国民間、交際ノ厚キ、之ヲ以テ証スルニ足ル」と感銘を受けている。<sup>(17)</sup> 福島にとってもマッカーマント大尉にとっても、印象の良い出会いであったといえる。福島のイギリス観は決して悪いものではなかった。それどころか「文明国」としてのイギリスに好意的なイメージをもっていったことがうかがえる。

こうした日常の翻訳、通訳の業務に加えてさらに着目したいのは、山県有朋陸軍卿との直接的な関係が強いことである。たとえば一八七六(明治九)年六月一日、福島は本所錦糸町二番地の高野貞潔(妻の父)方より牛込揚場町一七番地の華族中山邸内に転居した。引越の手続きを終えた日没後、陸軍省の使いが平賀大尉の書簡を持参し、その内容は山県陸軍卿が福島を自邸に招きたいというものであった。そこで直ちに同邸に向かうと、山県は用事がなくて暇なので「地誌を尋問」したいという<sup>(18)</sup> ことであり、居合わせた内閣顧問の木戸孝允、工部省七等出仕の末松謙澄(翌年、山県の秘書官となり西南戦争に従軍)とも面会している。

六月五日、やはり福島は午後三時に山県邸を訪れ、地理を講じ、五時

ごろ帰宅している。<sup>(79)</sup> 一三日にも夕方から九段の山県邸に出向き、同じ訪問客の曾我祐準少将、原佳仙にも会った。<sup>(80)</sup> このように世界の地誌、地理に通じた福島は山県陸軍卿に重宝がられ、たびたび呼び出されていた。その結果、六月二三日にフィラデルフィア万博派遣の命を受けるのである。<sup>(81)</sup> その翌年、西南戦争の勃発にあたって福島は山県の下で征討軍団書記となり、さらにのち文官から武官に転じて山県の伝令使に就任するが、その萌芽は早くから現れていた。

なお陸軍の文官として働く一方、福島は依然として勉学に励んでいた。たとえばある日、浅草の遠藤敬止なる人物の家で「文明論の会議」、つまり勉強会を開いたが、皆が漢学の知識に乏しいのを遺憾に思い、漢学に達した教師を一人選ぶことに決めた。月三円ないし六円を出し、その人物を各々の自宅に呼んで、一週間に二回（一五時～一七時半）、文章論および史記、左伝などを講じてもらうことにしたのである。<sup>(82)</sup> また別の日には福島自身の家で文明論の勉強会を開いている。<sup>(83)</sup> 福島とその有志は、当時よく読まれていたギゾーの『ヨーロッパ文明史』（François Pierre Guillaume Guizot, *The History of Civilization in Europe*）のような文献の講読会を行っていたものと考えられる。大学南校を退学し、私塾を渡り歩くなど苦勞を重ねた福島は、司法省に加えて陸軍省就職後もあくなき向学心を発揮していた。

陸軍文官時代の福島にとって最大の事件としては、フィラデルフィア万博見学以外では、一八七七（明治一〇）年一月から九月までの八ヶ月にわたった西南戦争をあげなければならない。同年二月一五日、西郷隆

盛を頂く薩軍が熊本に向かって進軍を開始すると、政府は征討軍（征討総督・有栖川宮熾仁親王、参軍・山県有朋陸軍中将、川村純義海軍中将）を編成した。同月二〇日、福島は参謀局で大阪行きの命令を受け、横浜から一、〇〇〇人を超える警察官（巡査、警視、警部）を收容した汽船に同船して出港し、二三日、大阪から汽車で神戸の三宮に到着後、神戸から山県陸軍卿らと同じ船で九州に向かった。福島が征討軍団書記を拝命したのはこの日のことであった。以後、馬関を経て博多に上陸し（二五日）、征討総督本営にしたがって四月一七日に熊本、七月二五日に鹿児島に入った。さらに八月六日都城、一八日宮崎、二一日高鍋、二二日新町、二四日細島（現・宮崎県日向市東部、細島半島にある地名であり、「島」ではない）へと進んだが、細島で脚氣となったため後送された。<sup>(84)</sup>

熊本に入るまでの間、福島は多忙をきわめた。大阪で征討軍団書記を命じられてから、絶えず征討総督本営付で山県参軍のもとにあった彼は、「日夜甚々繁激ニシテ、殊ニ熊本城連絡ノ以前ノ如キハ一寸ノ安眠モ出来ス。頗ル心痛致シ居候」といった状況にあった。<sup>(85)</sup> 書記である福島は文官であって、実戦に参加したわけではない。しかし職務上、前線から様々な戦闘詳報が入り、それを処理しなければならなかった。そのうちの目ぼしい情報を、彼は日記に書き留めている。田原坂の激戦が行われていた三月、福島はまだ福岡に駐留していたが、以下のような文書に接し、それを筆写した。<sup>(86)</sup>

昨今戦猛シク、竟ニ今日午後六時頃、田原坂ヨリ少シ背後ノ砲聲ヲ

攻ヌキ、是ヨリ速ニ植木ヲ取ルニ都合ヨシ。多分明日ハ熊本城ト連絡ヲトル。委細罷リ通り御届ケ申ス。総督へ宜シク御届ケヲ頼ム。三月九日 川村参軍 小澤大佐

これは征討総督本営の参謀であつた小澤武雄陸軍大佐（福島とともにフィラデルフィア万博に派遣）より海軍の参軍・川村純義中将に託された有栖川宮征討総督への伝言である。このような本営中枢部の文書、情報に福島はアクセスすることができたわけである。また薩軍に包囲された熊本城では、薩軍兵力の減退にともない、部隊をたびたび城外に出撃させた。それについて福島は、まだ本営と彼自身、熊本に到達していなかった時点で以下のような情報を得て、やはり筆写している。<sup>87)</sup>

〔四月〕八日 熊本城兵突出ノ一大隊ハ、奥〔保鞏〕少佐之ヲ卒ヒ、午前三時城門ニ整列、続テ城ヲ出テ、ヤブノウチ橋ヲ渡リ、通り町へ出ル。中間ヨリ右ニ曲リ、安政橋ノ川上ヲ徒歩渡リシ。此安政橋ノ両側ニハ賊兵アルヲ以テ、残ル哨兵ナシ。賊ニ当リ突出ノ一大隊ハ其虚ニ乗シ、中牟田村六ヶ村御船街道ヲ通貫シ、御取川ヲ徒歩渡リシ。限ノ庄ニテ官軍ノ偵察兵ニ逢フ。是ヨリ木原山ニ添フテ宇土ニ着ス。賊士一名ヲ擒ニシ、我兵死傷三名ナリ。黒川ヨリ報知。

このようになりにかなり詳しい戦闘の状況を福島は知ることができた。さらに本営とともに熊本に入ってから、次のような記録を残している。<sup>88)</sup>

四月十八日  
龍田山〔立田山〕ニ登ル。山腹招霊社ノ石、悉ク賊ノ破壊スル所トナレリ。賊、之ヲ坪井川ノ妨水ニ用ヒシト云フ。又、墓ヲアバキ、見ルニ忍ビタルノ兇暴ヲ極メタリ。墓碑戦地ノ字ヲマ〔磨〕滅ス。軍用電信局ヲ開ク。

四月廿日  
午前〔零時〕第三十分頃ヨリ頼リニ水善寺〔水前寺〕ノ方ニ砲声アリ。城内戒厳ス。一時后ニ至テ全ク止ム。此夜賊兵襲来ス。哨兵撃テ之ヲ退ク。

午前六時ヨリ諸口進撃、別働隊ハ御舟ヲ取り、其兵ハ水善寺ヨリ進テ、竹ノ宮八丁馬場等ニ入り、別働第五旅団ハホタクボ新南部下南部等ヲ陥レ、三浦ノ手、并ニ二旅団ハ格別ノ戦ヒナシ。

熊本城内の征討総督本営参謀部にあつて福島は、右のような戦闘状況を知ることができた。また当初、撤退した薩軍の所在は明らかではなかつたが、「探偵」がそれを突き止め、人吉を根拠地として日向、大隅、薩摩の間に兵を出していることがわかつた。しかし政府軍側は兵の部署を定めて諸口で戦い、「官軍勝利多ク、死傷甚タ少ナシ」といった有利な情勢にあると福島は父親に書き送っている。<sup>89)</sup>

七月、政府軍は薩軍を追つて都城に進撃した。当時、海上ルートによつて熊本から鹿児島に入つていた福島自身はその戦いを実見したわけでは



ないが、前線から総督本営に送られた情報にもとづき、妻にその有様を以下のように伝えている。

近來官軍愈々勝利、既ニ去ル廿四日、四旅団ノ大兵ヲ以テ都ノ城ヲ襲撃、賊心ト死ヲ極メテ防戦スルト雖トモ竟ニ官兵ノ奮進ヲ支ル能ハス一時ニ敗走、市街ニ火ヲ放ツノ暇モナク頗ル狼狽シテ逃走セリ。未タ詳ラカナラズト雖トモ、降伏ノ人員千七百ニ及ビシト云フ。斯ノ如ク賊ノ人員ハ漸ク減少シ、又糧米ニ欠ケリ、彈藥ニ困リ、人望ヲ失ヒ、内論ヲ生シテ互ニ疑念ヲ抱キ、勢ヒ井中ノ蛙ノ如ク如何共セン方ナシ。之ニ反シテ官兵ハ次第ニ其人員ヲ増加シ、進ムヲ知テ退クヲ忘シ、毎戦全勝、勇氣以前ニ二百倍シ、彈丸ヲ冒シテ先ヲ争ヒ、実ニ賞スベキ有様ナリ。最早平定目前ニ迫レリ。<sup>90</sup>

妻にあてた文章なので、正確を期した報告書ではなく、やや情緒的なトーンが見受けられるが、ここで福島が「最早平定目前ニ迫レリ」と戦争の終結を予告している点に着目したい。城山の戦いで薩軍が敗れ、西南戦争が終了したのはそれから約二ヶ月後の九月二四日であった。福島は下級官吏とはいえ、征討総督本営において多くの機密に接していたため、戦争の帰趨を早くからつかむことのできる立場にあったといえる。

ただし戦争の終了を目前にして、福島は既述のように八月末、細島で脚気となって後送された。<sup>91</sup> そのころの福島は病人でありながら活字情報にも敏感で、戦争前には『読売新聞』を講読していたが、<sup>92</sup> 東京に引き揚

げる途中、有馬温泉で療養した際には、『團圓珍聞』と『読売新聞』を妻から送ってもらっている。<sup>93</sup> そして病気が快方に向かうと、「帰京之上ハ此度こそ一世一代ノ奮発ヲ顕シ、十分勉強、聊カ名誉ヲ後世ニ伝ヘント追思ヒ込ミ居候」との決意を語った。<sup>94</sup> 勉学に励み、自分の名を揚げたというのである。

西南戦争が完全に終息してから約七ヶ月後、福島は臨時士官登用試験に合格し、<sup>95</sup> 一八七八（明治一一）年五月七日、陸軍中尉（歩兵科）に任官するとともに、参謀局伝令使に任命された。<sup>96</sup> こうして福島は陸軍卿から参謀本部長に転じていた山県有朋直属の伝令使二名のうちの一名となったのである。

陸軍将校となった福島は、ますます仕事に打ち込んだ。父親に対して、五年ぶりになるので帰省したいところだが、（一八七九（明治一二）年八〜二月の清国調査旅行より）帰朝後、ことのほか繁忙で、とても都合がつかないと書き送っている。その代りに彼は、父に自分の写真と山県に書いてもらった書画を送ることにした。<sup>97</sup> またあるいは父親に、近頃〔山県〕参謀本部長の直命で「隣邦兵備略」という出物の取り調べに従事しており、少なくとも六〇日間は身体を自由を得ないので、到底約束の期限までに帰省はできない、また明日から東京鎮台諸兵大演習のため山県中将に随行して下総地方に向かうので、ことのほか繁忙であると洩らしている。<sup>98</sup>

ここには山県に重用されながら、情報勤務に励む福島の様子が映し出されている。大学南校や私塾で世界地理の勉強に励み、陸軍で地誌に詳し

い文官として山県に見出された福島は、西南戦争が起こると征討総督本営付の書記として、はじめて戦場での情報を取り扱う任務についた。その上で文官から武官に転じて山県直属の伝令使となり、本格的な情報活動に専心していったのである。

### おわりに

本稿では明治後期に陸軍の情報活動、インテリジェンスの中核を担った福島安正が、明治初年の青少年期、どのような足跡と思想形成過程をたどったかを検証した。結論として以下の五点を指摘することができる。

第一に、幕末の松本藩時代から新式の軍事教練などを通じて西洋化の波を受け始めていた福島は、明治維新直後、開成学校、大学南校で英学を学んだ。学資が続かず大学南校は退学したが、その後、私塾の北門社を経て、蘭疇社のズイッヒェル、林邸居住の漢学者・巖田正義、江藤新平邸のピン氏、耐恒学社のホワイト、個人教師の鈴木唯一、成功社といった形で学校と教師を転々としながら勉学、とくに英学に励んだ。

第二に、そうした過程で福島は西洋人と直に接し、彼らとコミュニケーションをとるといった経験を積んだ。それとともに日本の西洋化、「文明開化」を歓迎し、その進展を願う彼は、たとえば陸軍文官時代、マッカーマント大尉を案内した際に見られたように、イギリスについては文明国としてポジティブなイメージを抱いていた。

第三に、司法省文官となった福島に大きな衝撃を与えたのは、一八七

四（明治七）年の台湾出兵であった。このとき清国との戦争を予想した彼は強い危機感を覚え、愛国心を燃やし、それが契機となって陸軍省文官、さらに武官へと転身していくことになる。

第四に、陸軍文官時代、フィラデルフィア万博に派遣され、さらに西南戦争に征討総督本営付書記として参加した福島は、戦場から送られる情報を取り扱う任務につき、これが彼の軍事情報活動の出発点となった。

第五に、以上の過程で福島の中で形成された根本的な価値観は、刻苦勉励して身を立て、家名を揚げ、さらに「皇威ヲ海外萬国ニ輝カサン」というものであった。自己の立身出世と日本の国権拡大、対外発展は彼においては矛盾せず、相補い合うものにほかならなかった。

以上の点に見られる若き日に培われた福島の特徴は、その後、陸軍で情報活動が続ける上でつねに彼の思想の根底にあり、その言動の基盤として作用することになるのである。

### 《注》

- (1) 拙稿「チベットをめぐる日本の諜報活動と秘密工作——一八九〇年代から一九一〇年代を中心に——」(1)、『拓殖大学論集 人文・自然・人間科学研究』第四〇号、第四一号、二〇一八年一月、二〇一九年三月、「一八八〇年代における日本陸軍の対清情報活動——福島安正を中心として——」『拓殖大学論集 政治・経済・法律研究』二三卷二号、二〇二〇年三月、「福島安正のユーラシア大陸旅行——一八八〇年代から九〇年代を中心として——」『拓殖大学 国際日本文化研究』第四号、二〇二二年三月。
- (2) 島貫重節『福島安正と単騎シベリヤ横断』上巻（原書房、一九七九年）。

- (3) ④の松本市立博物館所蔵の福島書簡の所在については、阿部由美子「長野県にある近代中国史関係資料と史跡について——川島浪速、川島芳子、肅親王善耆、河原操子、福島安正——」近現代東北アジア地域史研究会編『News letter』第二三二号、二〇一一年二月より知ることができた。
- (4) 秦郁彦編『日本陸海軍総合事典「第二版」』(東京大学出版会、二〇一八年第二版第三刷)、一三五頁。
- (5) 「福島将軍年譜」太田阿山編『福島将軍遺蹟』(東亜協会、一九四一年六月、大空社、一九九七年復刻)所収、三六七頁。
- (6) 田中薫『シリーズ藩物語 松本藩』(現代書館、二〇〇七年)の第五章「松本藩の幕末・維新」。そのほかに、金井圓「松本藩」児玉幸多、北島正元監修『新編物語藩史』第四卷(新人物往来社、一九七六年)所収、信州大学教育学部歴史研究会編『信州史事典1——松本藩編——』(名著出版、一九八二年)も合わせて参照した。
- (7) 「維新前松本藩士族屋敷割図」(松本市立博物館所蔵)は「国宝松本城」のウェブサイトで閲覧が可能である。https://www.natsumoto-castle.jp/collection/type01/635.html (二〇二二年六月二八日閲覧)。
- (8) 説明板は一九九三(平成五)年三月、松本市城北地区景観整備委員会が立てたものである。
- (9) 前掲、「福島将軍年譜」三六七頁。
- (10) 福島安正「慶応元年ヨリ明治四十年ニ至ル履歴」、国立国会図書館憲政資料室所蔵「福島安正関係文書」九二(以下、憲政資料室所蔵「福島関係文書」と略記する)。この史料については、拙稿「資料紹介 福島安正『慶応元年ヨリ明治四十年ニ至ル履歴』」『拓殖大学論集 人文・自然・人間科学研究』第四四号、二〇二〇年一〇月において全文翻刻を行っている。
- (11) 同右、ならびに前掲、「福島将軍年譜」三六七頁。前掲、貴貫『福島安正と単騎シベリヤ横断』上巻、三四―三六頁も合わせて参照した。
- (12) 上沼八郎『伊沢修二』(吉川弘文館、一九六二年)、二二―二四、三四―三六頁。ここで伊沢が選ばれたという大学南校の「貢進生」について述べておきたい。一八七〇(明治三)年、太政官は各藩の優秀な青年(一六

二〇歳)を大学南校に集めるため「貢進生制度」を導入した。これにもつき一五万石以上の藩は三名、五万石以上は二名、五万石未満は一名の学生を選抜し、学資の便宜をはかって東京に送り出した。貢進生に選ばれた者としては一八五一年生の伊沢のほかに、五四年生まれの高平小五郎、古市公威、五五年生まれの小村寿太郎、杉浦重剛、穂積陳重、五六年生まれの嶋山和夫などがおり、『東京帝国大学五十年史』所載の「貢進舎生姓名簿」にも伊沢、高平、小村、杉浦の氏名はあるが、松本藩(六万石)は「田邊節」とあるだけで、福島(一八五二年生)の名はない(『東京帝国大学五十年史』上冊、東京帝国大学、一九三三年十一月、一四七―一六三頁)。福島は貢進生ではなかったと考えられ、のちに学資が続かず、大学南校を退学することになる一つの原因はその点にあったのではないかと推察される。

- (13) 前掲、福島「慶応元年ヨリ明治四十年ニ至ル履歴」。
- (14) 東京大学百年史編集委員会編『東京大学百年史』通史一(東京大学、一九八四年)、二〇、二八、九五―九六頁。なお開成学校、および同時期に接収復興された医学校(旧医学所)、昌平学校(旧昌平坂学問所)の三校が東京大学設立(一八七七・明治一〇年)の源流をなすことになる(同書、八一頁)。
- (15) 同右、九六、九八頁。
- (16) 同右、九九―一〇一、一二六―一二七頁。
- (17) 福島が正則と変則のどちらを選んだかは明らかではない。福島より五年遅れて入学した牧野伸頭の場合、「その当時授業は凡て英語で行はれ、僅に日本歴史が日本語で教授されるだけだった」と回想している(牧野伸頭『回顧録』第一巻、文藝春秋新社、一九四八年、六三頁)。福島の場合もネイティブか否かは明らかではないが、少なくとも日本人の教員から英語による授業を受けていた可能性がある。
- (18) 前掲、『東京大学百年史』通史一、一五五―一六一頁。生徒のレベルは九段階に分類され、一等から四等までが専門科、五等から八等までが普通科であり、春秋二回の定期試験によって等級が決まった。授業時間は午前

- 九〜一時(のち一二時)、午後一〜三時であり、夏期休暇(六月二日〜七月二〇日)と冬期休暇(二月二五日〜一月一〇日)が設けられていた。生徒数は一、〇〇〇名、入舎生は五五〇名をそれぞれ上限とした(同書、一六〇頁)。
- (19) 前掲、上沼『伊沢修二』、三八頁。
- (20) 外務省編『小村外交史』(原書房、一九六六年)、一六頁。
- (21) 神足勝記「大学南校以来」村田保定編『安場咬菜・父母の追憶』(安場保健発行、一九三八年二月)所収、四四一頁、鳩山一郎『私の自叙伝』(改造社、一九五一年)、三五頁。
- (22) 前掲、牧野『回顧録』第一巻、六五頁、前掲、鳩山『私の自叙伝』三三三頁。
- (23) 福島安正筆「大学南校生徒心得」一八七〇年九月中旬筆写、憲政資料室所蔵「福島関係文書」一〇一八。
- (24) 一八七一年二月二日付、福嶋運治身元引受証、憲政資料室所蔵「福島関係文書」一〇〇九一。
- (25) 前掲、「福島將軍年譜」三六七頁。
- (26) 同右。この年譜はオットー・ズィツヒェルを「オット・シセル」と誤って記載している。なお、北門社は一八六九年に函館の貿易商人、実業家であった柳田藤吉の出資によってつくられた。柳田は福沢諭吉や箕作麟祥の勧めにたがって学校を起こすことにし、早稲田にあった三井家所有の旧高松藩下屋敷を買ってそのまま校舎にあてた。正式な校名は「北門社新塾」で、生徒数は三〇〇名とし、数名の教師が雇われることになった。当初学校の管理は山東一郎に任せられたが、入塾志願者が多く手不足のため、やはり早稲田で西洋式病院の蘭疇院を開設した医師の松本良順が招かれて共同管理者となった。北門社は設立者柳田の意志により、四万八千両の資金をもって三年間無月謝で維持する見込みであったが、志願者の増加で開塾期限を短縮して閉鎖することになったという。その後、跡地は大隈重信が購入し、その別邸(現、大隈庭園)となった(早稲田大学大学史編集所編『早稲田大学百年史』第一巻、早稲田大学、一九七八年、四二四―四二七頁)。
- (27) ズィツヒェルとの合意書、憲政資料室所蔵「福島関係文書」一〇一五一。
- (28) 「一八七三年」八月一日付・福島安正より福島安広宛、憲政資料室所蔵「福島関係文書」一〇一五一。読みやすさを考慮して、文意を損なわない程度に原文を現代語に改めた。以下、現代語訳の引用については同様。
- (29) 宗福寺は曹洞宗の寺院で東京都新宿区須賀町一〇―二に現存する。四ツ谷駅より九〇〇mの地点にあり、北門社があった早稲田から三・五km、徒歩四五分程度で行ける距離である。
- (30) 「一八七三年」二月一日付・福島より福島安広宛、憲政資料室所蔵「福島関係文書」一〇〇二。ここで福島はズィツヒェルのことを「シセル」と記している。あるいはズィツヒェルは教え子たちと英語で会話をする中で、自分のことをやや英語風にズィセルとも呼ばせていたのかもしれない。前掲「福島將軍年譜」がシセルの語を用いているのも、そういうところから来ているのではないか。
- (31) 前掲、「福島將軍年譜」三六七頁。なおズィツヒェルはやがて自身の蘭疇社が廃止になり、学生が散り散りになろうとしたとき、福島だけを留めて新たな就職先となった後述の軍医寮に伴い、さらに退校する生徒たちを率いて市ヶ谷御門外の洞雲寺に私塾・化成社を設けたという(前掲、「一八七三年」二月一日付・福島より福島安広宛)。
- (32) ここで「西洋に対して屈折した心理が少なく」と記したが、もちろん当時の学生が西洋一辺倒であったわけではない。大学南校の学生の多くは、最初は「単純な攘夷党」であった。たとえばフルベッキ夫人が帰省を終えて日本に戻ったとき、出迎えたフルベッキと夫人が相抱擁、相接吻したのを目撃した彼らは、これを「獣類の行為」と呼んで憤慨した。しかし学問が進むにつれて、欧米が先進国であることを認め、渡航留学したいとの情熱を抑えがたくなったという(前掲、外務省編『小村外交史』、一六一―一七頁)。これが普通の学生の態度であったが、とりたてて彼らと異質な人生を歩んできたわけではない福島も、同じような心理を抱いていたのでは

ないかと推察される。

- (33) 前掲、「二八七三年」二月一日付・福島より福島安広宛。
- (34) 前掲、「福島將軍年譜」三六七頁。同じころ、福島よりも一歳年長（一八五一年生）の栗野慎一郎は愛宕下の勸学塾でイギリス人のアイザック・ランバート (Isaac Lambert) について学び、自得するところがあったという（池田哲郎「九州英学史（下）」——福岡・長崎——『英学史研究』一九七二巻四号、一九七二年四月、二頁）。
- (35) 前掲、「二八七三年」二月一日付・福島より福島安広宛。
- (36) 「二八七三年」四月七日付・福島安広より福島安広宛書簡、憲政資料室所蔵「福島関係文書」一〇一五—四。
- (37) 前掲、「福島將軍年譜」三六七頁、福島「慶応元年ヨリ明治四十年ニ至ル履歴」。
- (38) 前掲、「二八七三年」二月一日付・福島より福島安広宛。
- (39) 一八七三年四月三日に司法省に勤めはじめてからごくわずかの間、遅くとも四月七日には江藤邸に移っている。前掲、「二八七三年」四月七日付・福島より福島安広宛書簡の封筒には「東京三大区麹町七丁目二十番地 司法卿江藤新平邸偶居 福島安広」と裏書されている。なお麹町から司法省までは歩いて三〇分程度で、通勤時間は大幅に短縮された。
- なお江藤は福島を自邸に住ませた直後の四月一九日に司法卿から参議に転任した。しかしそれから半年後の一八七三年一〇月、明治六年政変によって参議の職を辞し、翌一八七四年二月に佐賀の乱を起こした結果、四月に刑死する。こうした江藤の末路が福島に衝撃を与えたことは想像に難くない。
- (40) 前掲、「二八七三年」二月一日付・福島より福島安広宛。
- (41) 同右。
- (42) 同右。司法省に職を得たものの、彼の給料はごく低いものであった。あるとき父親の安広が不慮の支出のため福島に送金を頼んだところ、一、二回くらいは至急の才覚もできるが、三回以上はなかなか力に及び難く、そのときは悪しからず思し召されて下さいと返答している。今月四円を用立

ても、来月には返済しなければならず、そうなる手持ちはわずかに六円となって公私支出の半分は不足し、改めて四、五円の金策に苦しむことになるので、毎月思志を休める暇がなく、自然学務の妨害となってしまいます。「ア、如何ニセン」、しかし現在の困却を傍観するのは子たる者の務めではなく、及ぶところの力を尽くして月末までに少しでも送金したい、と福島は苦しい懐具合を打ち明けている（「一八七四年」八月二六日付・福島安広より福島安広宛、司法省野紙、憲政資料室所蔵「福島関係文書」一〇〇三）。しかしそれでも二日後と考えられるが、父に三円を送金している（「一八七四年九」八月二八日付・福島安広より福島安広宛、憲政資料室所蔵「福島関係文書」一〇一〇）。

- (43) 前掲、「二八七三年」二月一日付・福島より福島安広宛。
- (44) 同右。
- (45) 同右。
- (46) 前掲、「福島將軍年譜」三六七頁。福島は一歳のときに亡くなった母に代わって自分を育ててくれた祖母に深く感謝しており、たとえ一日でもよいかから祖母に東京の繁栄ぶりを見せ、わずかでもその恩に報いたいと念願していた（前掲、「二八七三年」二月一日付・福島より福島安広宛）。
- (47) 前掲、「二八七四年」八月二六日付・福島より福島安広宛。
- (48) 前掲、秦編『日本陸海軍総合事典』第二版、一三五頁。
- (49) 前掲、「二八七四年」八月二六日付・福島より福島安広宛。
- (50) 前掲、「二八七四年九」八月二八日付・福島より福島安広宛。
- (51) 同右。
- (52) 一八七四年七月二六日付・福島安広より福島安広宛、憲政資料室所蔵「福島関係文書」一〇〇一—二。
- (53) 前掲、「二八七四年」八月二六日付・福島より福島安広宛。
- (54) 同右。
- (55) 前掲、島貫『福島安広と単騎シベリヤ横断』上巻、二五頁、原文は福島安広『単騎遠征報告総論』第一、防衛省防衛研究所戦史研究センター史料室所蔵、文庫—千代田史料—二二二、一頁。



- (56) 前掲、福島「慶応元年ヨリ明治四十年ニ至ル履歴」。
- (57) 前掲、島貫『福島安正と単騎シベリヤ横断』上巻、三五頁。
- (58) 前掲、福島「慶応元年ヨリ明治四十年ニ至ル履歴」。
- (59) 前掲、秦編『日本陸海軍総合事典』第二版、「一六三、五〇五—五〇六頁」。
- (60) 前掲、福島「慶応元年ヨリ明治四十年ニ至ル履歴」。
- (61) 吉田光邦『NHK市民大学 万国博覧会とその歴史と役割』(日本放送出版協会、一九八五年)、六一—六六頁、同『改訂版 万国博覧会——技術文明史的に——』(日本放送出版協会、一九八五年)、七八—八一頁。
- (62) 関根仁「一八七六年フィラデルフィア万国博覧会と日本——参加過程・状況を中心に——」『中央史学』第二四号、二〇〇一年三月、八四頁。別の研究では、入場者は一、〇一六万を数えたとされている(前掲、吉田『NHK市民大学 万国博覧会』、六三頁)。
- (63) 前掲、関根「一八七六年フィラデルフィア万国博覧会と日本」、八七—九〇、九二、九七、一〇〇—一〇一頁。日本側が用意した日本館は二階建て、瓦ぶきの屋形風のもので、別に住宅風の売店も設けられたほか、周囲には日本式の庭園がつけられた。日本からの出品物は一四二のメダルを得ることができ、まず成功であった(前掲、吉田『NHK市民大学 万国博覧会』、六六—六七頁)。別の研究によると、日本の出品物が万博事務局から受けた褒章は一五五点となっている(伊藤真実子『明治日本と万国博覧会』吉川弘文館、二〇〇八年、二四頁)。
- (64) 前掲、関根「一八七六年フィラデルフィア万国博覧会と日本」、九五頁。
- (65) 杓名貴彦「勸農開物翁の幕末・明治——田中芳男と博覧会・博物館——」佐野真由子編『万博学——万国博覧会という、世界を把握する方法——』(思文閣出版、二〇二〇年)所収、八七—八八頁。
- (66) 前掲、関根「一八七六年フィラデルフィア万国博覧会と日本」、九二—九四頁。
- (67) 前掲、島貫『福島安正と単騎シベリヤ横断』上巻、四—五頁。福島日記一八七六年六月二三日の条、前掲、太田編『福島将軍遺蹟』所収、三二—
- 頁。「外務へ福原大佐等米国行に付申入」JACAR (アジア歴史資料センター) Ref. C04026771000「大日記 官省使庁府県送達 六月土 陸軍省第一局」(防衛省防衛研究所)。「宮内へ福原大佐外米国行に付参内云々掛合」JACAR: C04026776400「大日記 官省使庁府県送達 七月土 陸軍省第一局」(防衛省防衛研究所)。
- (68) 前掲、福島「慶応元年ヨリ明治四十年ニ至ル履歴」。出国から帰国までメンバー全員が完全な団体行動をとったかどうか不明であり、ここではとりあえず福島の出国日、帰国日のみを記した。福原、小澤、石黒、黒田、福島の名は一月一日付で陸軍省に帰朝届がなされているので、一緒に帰国したと考えられる(「宮内へ米国より帰朝の者更に省云々回答」JACAR: C04026827700「大日記 送達の部 一月土 陸軍省第一局」防衛省防衛研究所)。そのほかの西郷、野津、川崎の三名の薩摩出身者は別行動をとった可能性がある。
- (69) 前掲、島貫『福島安正と単騎シベリヤ横断』上巻、五—一頁。
- (70) 佐野真由子「序説・万国博覧会という、世界を把握する方法」前掲、佐野編『万博学』所収、三—四、一—二頁を参照のこと。
- (71) 吉田邦光編『図説万国博覧会史——一八五—一九四二——』(思文閣出版、一九九九年第三版)、二五—二七、五七—六二、七七—八〇、一四—一五、一三—二頁にそうした細密画が掲載されている。同じく日本館については、同書口絵三頁、四〇—四一、一五〇、一六一頁。平野暁臣『万博の歴史——一八五—一九七〇——』(小学館クリエイティブ、二〇一七年)、五二—五三、五五頁掲載の画も合わせて参照した。
- (72) なお、後に福島はアメリカで同国政府より寄贈された若干の書籍を陸軍省に献納している(一八七八年二月一九日付・福島安正より福島安広宛、憲政資料室所蔵「福島関係文書」一〇一—一〇一六)。
- (73) 福島日記一八七六年六月五日、六月二五日の条、前掲、太田編『福島将軍遺蹟』所収、三二—三三、三二—三三頁。
- ちなみに翌一八七七年、後述するように福島は西南戦争に従軍し、書記の任務を遂行するが、その合間においても戦争とは直接関係のない海外地

理に関する翻訳作業を継続していた形跡がある。その一例として、当時誕生からまだ日の浅かったルーマニア公国（一八五九年成立、一八八一年より王国）についての以下のような記述が残されている。これは今日確認することのできる彼の示した外国情報として、もっとも古いものである（明治十年日記、天理大学附属天理図書館所蔵、〇八一―イ二七―一）。

#### 羅馬尼

○摩拉達維（モルダヴィア）及ヒ襪拉幾（ワラキア）ノ二侯国、一政府ノ下ニ相聯合セシメ□之ヲ羅馬尼ト名ク。

○域内人口四百五十万。

○摩拉達維（モルダヴィア）ハ二侯国中ノ北部ニシテ、奥地利匈牙利〔オーストリア・ハンガリー〕及ヒ魯西亜ノ間ニ位ス。首府ヲ乎西〔ヤシ〕ト云フ、人口八万。加拉斯〔カラス、現メドジディア〕ハ国ノ東南、多脳〔ダニューブ、ドナウ〕ノ河岸ニ連ル。通商最モ盛ノ地ニシテ、船舶ノ来往織ルカ如ク、人口六万。其他主眼ノ都府ヲイスマイル〔イズマイル、現ウクライナ領〕及ヒキリア〔現キリア・ベケ〕ト名ク。共ニ多脳河ニ浜ス。一千八百五十六年、魯西亜ヨリ得シトス。

〔○〕襪拉幾（ワラキア）ハ、北ハ加尔白山脉〔カルパティア山脈〕ノ境ニ、東西南ノ三面ハ共ニ多脳河ニ連ナリ、首府ヲ不加勒斯〔ブカレスト〕ト云フ。即チ羅馬尼全部ノ京城ニシテ人口十三万、市街甚タ方正ナラズト雖トモ、建築頗（ル）美麗ニシテ見ルニ足ル者多ク、府外遊園甚タ多クヲナス。ジウロゼヴヲ〔ジュルジュ〕ハ多脳河ニ浜シ、堅固ノ城砦ヲ築ク。国ノ南方ニアリ。ブラヒロヴ〔ブライラ〕ハ又、多脳河ニ跨リ、貿易甚タ繁昌トス。人口四万五千、国ノ東部ニアリ。クライヴァ〔クラヨーヴァ〕ハ国ノ西部ニ位ス。即チ小襪拉幾〔小ワラキア。ワラキアの西部をいう〕ノ首府トス。

ルーマニアの主要都市に関する紹介である。福島が日ごろ翻訳し、後述

のように山県有朋陸軍卿にも伝えていた海外の地理情報には、以上のようなものも含まれていたのではないかと考えられる。なお右の引用文には日付が入っていないが、その前後に記された文章から、一八七七年三月二十七日以降、六月四日前に書かれたものであると推察される。この一文は前掲『福島將軍遺績』所収の日記とは別の頁に書かれており、『遺績』には掲載されていない。

(74) 福島日記一八七六年六月七日、八日の条、前掲、太田編『福島將軍遺績』所収、三三四頁。

(75) 前掲、『福島將軍遺績』に転載された日記は、原文からの写し間違いや抜け落ちがあり正確な記録とはいえないため、日記の原本である明治九年日記（天理大学附属天理図書館所蔵、〇八一―イ二七―一）と照合した。その結果、「Hyth」は「Hugh」が正しいことが判明したが、「Mo Catmont」についてはその通りに記されていることがわかった。しかしイギリス人、とくにアイルランド系で「Mo Catmont」という姓は通常はあり得ないと考えられる。

(76) 福島日記一八七六年六月八日の条、前掲、太田編『福島將軍遺績』所収、三三四頁。

(77) 同右。前掲、明治九年日記（天理図書館所蔵）より引用した。

(78) 福島日記一八七六年六月一日の条、前掲、太田編『福島將軍遺績』所収、三一九―三二〇頁。

(79) 福島日記一八七六年六月五日の条、前掲、太田編『福島將軍遺績』所収、三二二頁。

(80) 福島日記一八七六年六月一三日の条、前掲、太田編『福島將軍遺績』所収、三二六頁。

(81) 福島日記一八七六年六月三日の条、前掲、太田編『福島將軍遺績』所収、三三一頁。

(82) 福島日記一八七六年六月一四日の条、前掲、太田編『福島將軍遺績』所収、三二七頁。

(83) 福島日記一八七六年六月二日の条、前掲、太田編『福島將軍遺績』所

収、三三〇頁。

(84) 福島日記一八七七年二月二〇、二三、二五日の条、および日記中に記された行程表、前掲、太田編『福島將軍遺績』所収、三三五―三三八頁。前掲、福島「慶応元年ヨリ明治四十年ニ至ル履歴」。

(85) 「一八七七年五月」一五日付・福島安正より福島安広宛、松本市立博物館所蔵、〇〇四四―一七九。

(86) 福島日記一八七七年三月一〇日の条、前掲、太田編『福島將軍遺績』所収、三三八頁。この『福島將軍遺績』に転載された日記は、既述のように原文からの写し間違いなどがあるため、原本の前掲、明治十年日記（天理図書館所蔵）より引用を行った。

(87) 福島日記一八七七年三月一日の条、前掲、太田編『福島將軍遺績』所収、三三九頁。前掲、明治十年日記（天理図書館所蔵）より引用。

(88) 福島日記一八七七年四月一八日、二〇日の条、前掲、太田編『福島將軍遺績』所収、三三九頁。前掲、明治十年日記（天理図書館所蔵）より引用。

(89) 前掲、「一八七七年五月」一五日付・福島より福島安広宛。さらに六月、政府軍旅団が水俣から大口（現、鹿児島県伊佐市）をめざして進撃した際、その際の激しい交戦を次のように描写している（明治十年日記、天理図書館所蔵。前掲『福島將軍遺績』所収の日記とは別の頁に六月四日付で書かれており、『遺績』には掲載されていない）。

三日、第三旅団、上小場口攻撃、大関山及長左エ門ガマヲ抜き、進テ城山ヲ畧シ、続テ国見山及ヒ久木野ヲ落ス。久木野ハ我兵、之ヲ防禦スルニ地形甚タ悪シキヲ以テ、一谿ヲ隔テ、久木野ニ向テ防禦線ヲ定ム。此日野戦、及ヒ針歩銃ノ若干ヲ分捕ル。賊、死体ヲ散シ走ル。我兵、死傷四十余人。戦後、賊ノ踪跡ヲ知ラス。

大関山ノ戦ヒ、彼我議取スルコト五回ニシテ遂ニ我力有トナリ、激門奮撃、鋭創ヲ交ヘント云。

このとき福島はまだ熊本城下かそこから比較的近い所にいたと考えられ

るが、一日遅れてこうした前線の状況を知ることができた。

(90) 「一八七七年」七月二八日付・福島安正より福島貞子宛、憲政資料室所蔵「福島関係文書」一〇一一。

(91) 西南戦争中の福島はそれ以外にも病気が多く、疾病下痢（三月二日～七日）、熱痛（三月一日～三日）、病氣（五月一日～三日）といった記録がある（福島日記中に記された行程表、前掲、太田編『福島將軍遺績』所収、三三六―三三七頁）。前掲、島貫『福島安正と単騎シベリヤ横断』上巻は、これは福島が主として長崎に行つて同地の英米仏等の列国軍艦の動向を観察し、または種々の工作を行つた証拠と見るべきものである、福島は主として山県参軍の指示で外国勢力が鹿児島支援に走らないよう硬軟両様の工作を行つたと判断されるとしている（五四―五五頁）。同書では根拠となる資料が提示されていないので、そうした見方が正しいかどうか判断は難しい。あるいは福島は本当に病氣であつた可能性もあり、現時点で結論を出すのは困難である。

(92) 福島日記一八七六年六月二三日の条、前掲、太田編『福島將軍遺績』所収、三三二頁。

(93) 「一八七七年」九月二〇日付・福島安正より福島貞子宛、憲政資料室所蔵「福島関係文書」一〇一二。福島は脚氣の療養にあつたが、効き目がないため「甚タ難渋」し、陸軍臨時病院副長の石黒忠憲一等軍医正より診断書を得て、有馬温泉で三週間の入浴治療を行うことになった。一八七七年九月七日付・福島安正より陸軍省参謀局長・鳥尾小弥太中将宛、「願第三四二号 九月七日 有馬行の件 福島十一等出仕」JACAR: C09081379900 自己願書綴 指令済之部 明治一〇年五月六日～一〇年一月三〇日（防衛省防衛研究所）。

(94) 「一八七七年」一〇月六日付・福島安正より福島貞子宛、憲政資料室所蔵「福島関係文書」一〇一三。

(95) 前掲、「福島將軍年譜」三三八頁。

(96) 前掲、福島「慶応元年ヨリ明治四十年ニ至ル履歴」。

(97) 「一八八〇年二月」二二日付・福島安正より福島安広宛、天理大学附属

天理図書館所蔵、〇八一―イ二七―二六(二)一。

(98) (二八八二年) 四月七日付・福島安正より福島安広宛、天理大学附属天理図書館所蔵、〇八一―イ二七―二六(二)二。

(原稿受付 二〇二二年七月四日)